児童の創造性を育む“におい”のある教育と評価の検討

アートプロジェクトを介した児童・教師・保護者の量的・質的変化に着目して

三浦理絵（心と発達のカウンセリング空蔵）／岩間　賢（東京藝術大学）／田中美歩（東京学芸大学）／羽原康恵（アートマネージャー）

創造性の萌芽を促すには，
学校環境での体験基盤型のアートプロジェクトにおける，
児童の感受に寄り添った評価が効果的である。

■問　題

わが国で新たな価値を創造する人材を育成する目的で推進されているSTEAM教育の「A」は，アート及びリベラルアーツの意味であり，創造性育成には芸術（アート）の観点が必要という指摘がある（文部科学省，2021；駒組，2022；渡邊，2024）。また児童の創造性を検討する際は，創造性の発達的性質を検討する必要があり（Beghetto & Kaufman 2003），児童の創造性を評価する教員の育成や児童の活動評価について有効な方法を検討する必要がある。

■目　的

ある小規模小学校で実施されているアートプロジェクトに着目し，学校環境でのアートプロジェクトが児童の創造性にどのように関与しているのかを明らかにした上で、活動の有効な評価方法を探る。

■本アートプロジェクトについて

関東郊外の小規模特認校で，総合的な学習の時間などを活用して実施している。短期・単発のアートプロジェクトとは異なり，年間10回前後のプログラムとして本事業を6年間に渡って実施するものである。

PHESE1「認 知」
2019年～プレ事業として検証
A市教育委員会，NPO法人，東京藝術大学が企画立案しプレ事業を実施。

PHESE2「理 解」
2023年～本事業として実施
・教師も児童と一緒にアートプロジェクトに参加。
・“におい”のある教育と評価の研究を開始。

PHESE3「協 力」
2027年～
・A市教育委員会から受託事業として東京藝術大学が実施。

■2024年度の1年間の様子

5月
となりのスタジオ
・海外の異なる文化的背景を持つアーティストとの交流プログラム。



8月
教師向け研修会
・評価の見立て方を多様な視座から検証する。



11月
大地からはじまること
・身近な素材を活かした地域の宝物をつくるプログラム。

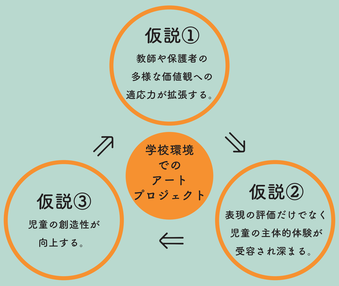


2月　3月
校内展示　A市の駅ビルにあるギャラリーで展示



■予備調査

アートプロジェクト企画者の芸術大学教員と運営を担うNPO職員4名にミーティング形式で聞き取り，仮説を生成した。



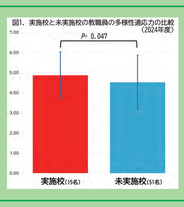
■方法

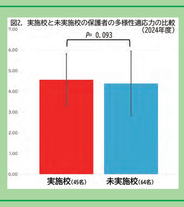
・本調査①ではアンケート調査を実施した。
　対象者：アートプロジェクト実施校：児童84名・保護者50名・教職員20名
　　アートプロジェクト未実施校：児童37名・保護者64名・教職員51名
・調査時期：2023年度～2024年度
・質問紙（1）多様性適応力（津々木ら，2015）7件法29項目8因子で，教職員と保護者を対象とした。
　（2）創造的自己効力感（Beghetto, 2006）5件法3項目1因子で，児童を対象とした。
　（3）「あなたの気に入った作品」を尋ね「その理由」を6項目から選択するもので，実施校の全対象に実施した。

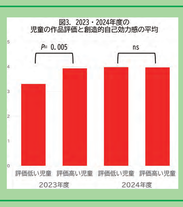
・本調査②では半構造化面接を実施した。
　対象者：実施校の児童・保護者2組，教職員11名，
　　アートプロジェクト企画運営者3名。
・調査時期と手続き：2025年2月～12月
　　半構造化面接を1名15分～30分間実施した。
・質問項目：（1）アートプロジェクトに参加して感じたこと。
（主なもの）（2）図工との違いについて感じたこと。

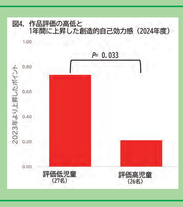
映像記録

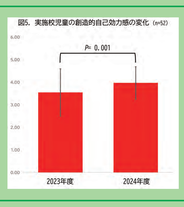
■結果と考察　本調査①

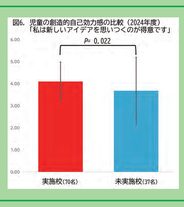






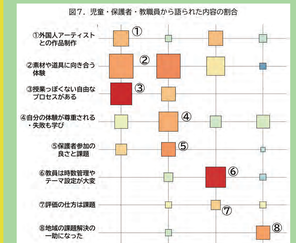


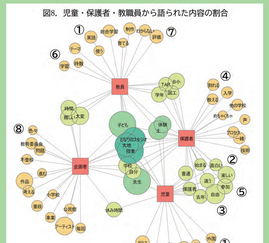




仮説①	仮説②	仮説③
アートプロジェクトに教師も参加したことにより，教師の多様な価値観への適応力が広がったと考えられる。	作品評価だけでなく，児童の多様な体験を教師が受容したことで，創造的自己効力感の向上につながったと考えられる。	アートプロジェクトを実施したことによって，児童が自分の創造性への自信が向上したと考えられる。

■結果と考察　本調査② 半構造化面接：発言をテキストマイニングにて分析（KH Corder3 樋口,2020）発言を８つのコンセプトで抽出した。





①②③④⇒
児童の自由な体験や，失敗も含めたプロセスが受け入れられている。

⑤⇒
保護者参加の良さと課題がある。

⑥⑦⇒
教員の時数管理や活動評価などの課題がある。

⑧⇒
アートプロジェクトが地域課題の解決への一助となっている。

■まとめ

一人ひとりが人や地域，素材，文化，環境と関わり世界を捉えなおしていくアートプロジェクトの中で，児童の主体的体験を教師が受け入れ，それが児童に伝わっていくという循環が生じたことが，自分の創造性に自信を持つ要因のひとつとなったと考えられた。
またアートプロジェクトが創造性育成に効果的であるのは，すでに社会的に決まっている評価規準によるのではなく，「においを嗅ぎ取るように，児童自身が感じ取り，世界を捉えなおすプロセス」があるからではないかと考え，これを「においのある教育」として考えた。したがって，アートプロジェクトにおける創造性の萌芽段階の効果的評価とは「児童自身の経験や気づきを起点とした，児童の感受に寄り添った評価」であると考えられた。具体的な評価方法は今後の課題であり，研究が進行中である。

